# アダム・スミス『国富論』における「生産・分配」理論

関西外国語大学英語キャリア学部教授　滝川好夫

## １　はじめに

アダム・スミス『国富論』は５つの篇から構成され、第１篇は「生産・分配」理論と貨幣・金融、第２篇は資本の理論、第３篇は経済史、第４篇は学説史、第５篇は財政をそれぞれ取り上げている。第１篇と第２篇が『国富論』の中核であり、経済の基本構造、経済の経済概念を論じている。『国富論』は「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスの本であり、経済学の父は「経済学とは、『生産・分配』理論と貨幣・金融、資本の理論、経済史、学説史、財政である」と考えていたのである。

『国富論』第１篇「労働の生産力における改善の原因と、その生産物が国民のさまざまな階級のあいだに自然に分配される秩序について」は１１の章から構成され、その主題は、労働生産性の向上はいかにすれば行われるのかと、「地代で生活する人々」「賃銀で生活する人々」「利潤で生活する人々」といった３大階級の間に労働の生産物がいかに自然に分配されるのかである。本稿では、『国富論』の第１篇第１～３、８～11章、第２篇第３章にもとづいて、『国富論』の経済理論を論述する。

## ２　分業による労働生産性向上（第１篇　第１～３章）

【分業はなぜ生じるのか：分業は人間の本性上の性向から生じる】

スミスは、「分業はなぜ生まれるのか」について、分業は「それによって生じる社会全般の富裕を予見し意図した人間の知恵の所産」ではなく、「広い範囲にわたる有用性には無頓着な、人間の本性上のある性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、交易し、交換しようとする性向の、緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結なのである。」（訳書 p.51）と述べ、分業は「取引・交易・交換したい」という「人間の本性上の性向」から生じたものであると論じている。

【「取引・交易・交換したい」は博愛心ではなく、自愛心からである】

「私の欲しいものを下さい、そうすればあなたの望むこれをあげましょう」といった申し出について、スミスは「われわれが呼びかけるのは、かれらの博愛的な感情にたいしてではなく、かれらの自愛心にたいしてであり、われわれがかれらに語るのは、われわれ自身の必要についてではなく、かれらの利益についてである。」（訳書 p.53）と述べている。すなわち、一国が富裕になるには労働生産性を高めなくてはならない、労働生産性を高めるためには分業を行わなくてはならず、分業は交換取引の成立によって担保され、そして交換取引の申し出は相手の自愛心に訴えることによって行われる。交換取引の申し出を行う人の欲望は合意により、交易により、購買によって充足されるのである。

【「分業」の効果：「労働生産性の向上」と「職業・仕事の分化」】

アダム・スミスと言えば「ピン作りの分業」で有名であるが、スミスは「小さい製造業 vs. 大きい製造業」における分業の度合いを考察し、製造業の大きさのいかんにかかわらず「分業」は実際に行われていると指摘している。

スミスは「分業は、それが採り入れられるだけで、どんな技術の場合でも、労働の生産力をそれにおうじて増進させる。この利益の結果として、さまざまな職業や仕事がたがいに分化したように思われる。」（訳書 p.36）と述べ、すなわち、第１に「分業」は労働生産性を向上させ、その結果、職業・仕事の分化をもたらした、第２に「分業」による職業・仕事の分化は最高度の産業と進歩を享受している国々で最も進んでいる、と論じている。

【分業による労働生産性向上の３つの理由】

スミスは、分業による労働生産性向上の理由として、以下の３つを挙げている（訳書 pp.38-43）。

(１)労働者の技能の向上

「分業」を行うことによって、労働者の技能は向上する。つまり、分業により、各人の仕事は単純な作業に還元され、また単純化された作業がその人の生涯のただ一つの仕事になるので、労働技能は必然的に増進する。

(２)次の仕事へ移る時間のゼロ化

１人の人がいくつかの作業を行うと、１つの仕事からもう１つの仕事へと移るときに時間のロスが生じるが、「分業」を行うと、仕事を変える時間のロスがなくなる。

(３)労働生産性を向上させる機械類の発明

スミスは「労働をこれほど容易にし短縮させるすべてのこうした機械類の発明が、じつは分業の結果生じているように思われる」（訳書 p.41）と述べている。つまり、「分業」は労働生産性を向上させる機械類の発明を促進する。

【分業と「製造業の労働生産性 vs. 農業の労働生産性」】

スミスは、「農業 vs. 製造業」における各分業について、第１に農業は完全分業を行うことが不可能であるので労働生産性は低いが、製造業は分業を行うことが可能であるので労働生産性は高い、第２に製造業の労働生産性は「富んだ国の労働生産性＞貧しい国の労働生産性」であるが、農業の労働生産性は必ずしも「富んだ国の労働生産性＞貧しい国の労働生産性」であるとは限らない、と論じている。

【職業・仕事の分化は交換取引の確実性によって担保】

「分業」の効果には「労働生産性の向上」と「職業・仕事の分化」の２つがあるが、スミスは「人はだれでも、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を超える余剰部分を、他人の労働の生産物のうちかれが必要とする部分と交換することができるという確実性によって、特定の職業に専念するように促される。」（訳書 p.55）と述べ、「職業・仕事の分化」は交換取引の確実性によって担保される。

【分業は市場の大きさによって制限】

スミスは、「分業をひきおこすのは交換しようとする力であるから、分業の大きさも、この力の大きさによって、いいかえると市場の大きさによって、制限されるにちがいない。」（訳書 p.59）と述べている。すなわち、市場の規模が大きければ、人は１つの仕事にだけ専念することができるが、市場の規模が小さければ、人は１つの仕事にだけ専念することができない。市場の規模は、「分業」したがって「職業・仕事の分化」を担保するものである。

【分業と資本】

スミスは、「所定の仕事がいくつかの部分からなるという場合、各人をいつも同一の仕事に従事させておくほうが、各人をそのときどきにさまざまな仕事に従事させておく場合よりも、はるかに大きい資本を必要とする。」（訳書 pp.642-643）と述べている。つまり、分業を行うにはより大きな資本が必要である。

【分業と分配：トリクルダウン】

現代経済学では、富が高所得層から低所得層へ徐々に滴り落ちるとする理論は「トリクルダウン理論」と呼ばれているが、スミスは「よく統治された社会では、人民の最下層にまで広く富裕がゆきわたるが、そうした富裕をひきおこすのは、分業の結果として生じる、さまざまな技術による生産物の巨大な増加にほかならないのである。」（訳書 p.43）と述べ、社会がよく統治されていれば、トリクルダウンが起こると論じている。

## ３　労働の分類：「生産的労働」 vs. 「不生産的労働」（第２篇　第３章）

【労働の分類：「生産的労働」 vs. 「不生産的労働」】

現代経済学ではモノの生産も、サービスの生産も価値の創造とみなしているが、スミス『国富論』はモノの生産のみを価値の創造とみなしている。スミスは、「労働には、それが投じられる対象の価値を増加する種類のものと、そのような効果を生じないもう１つの種類のものとがある。」（訳書 p.620）と述べ、価値を生産する労働を「生産的労働」、価値を生産しない労働を「不生産的労働」とそれぞれ呼んでいる。

(１)「生産的労働」：例えば、製造工の労働

１人の「生産的労働」（製造工の労働者）の生産物の価値＝「加工する材料の価値」＋「自分自身の生活維持費の価値」＋「雇主の利潤の価値」であり、１人の「生産的労働」の付加価値（価値創造）は「自分自身の生活維持費の価値」と「雇主の利潤の価値」の合計である。「自分自身の生活維持費の価値」は１人の生産的労働者が雇主（資本家）から前払いをしてもらっている賃金であり、スミスは「その賃金の価値は、一般に、かれの労働が投じられた対象の価値が増大し、利潤をともなって回収されるのであるから、製造工は実際には、雇主にとってなんの費用もかからないものである。」（訳書 p.620）と述べている。

(２)「不生産的労働」：例えば、家事使用人の労働、公共社会の使用人（司法官、軍将校など）

スミス『国富論』は、現代経済学とは異なり、モノの生産のみを価値の創造とみなし、サービスの生産を価値の創造とみなしていないので、１人の「不生産的労働」（家事使用人の労働）の生産物の付加価値＝０であり、１人の不生産的労働者は「自分自身の生活維持費の価値」を創造できないと論じている。スミスは「家事使用人の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品のかたちで固定されたり具体化されたりはしない。かれのサーヴィスは、それが行なわれるその瞬間に消滅してしまうのがふつうであって、それだけのサーヴィスと引換えになにかを入手できるだけのもの、つまり価値をあとに残すことは、滅多にない。」（訳書 p.621）と述べている。すなわち、スミスは、生産的労働者は対象に労働を投じ、投入労働の価値を回収できるが、不生産的労働者は対象に労働を投じても、何らの価値を創造しないので投入労働の価値（生活維持費）を回収できないと論じ、そして、「（不生産的労働者の－引用者注）労働にも価値があり、（中略）その報酬を受けるべきものであることは当然である。」（訳書 p.621）と述べている。

【社会の全住民の３タイプ】

スミスは、社会の全住民を「生産的労働者」「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」の３つのタイプに分け、以下のことを指摘している。

(１)「生産的労働者」のみがモノ（ＧＤＰ：「その国の土地と労働の年々の生産物の全体」）を生産し、生産されたモノは「生産的労働者」「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」によって消費される。

(２)モノが労働、資本、土地によって生産される場合、第１に流動資本（「食料品」「材料」「完成品」）が回収される、つまり１つは生産的労働者によって投入された労働の価値（生活維持のための「食料品」：労働者に前払いされた賃金）が回収され、もう１つは投入された「材料」が回収され、さらにもう１つは固定資本を維持するための「完成品」が回収される。第２に資本家に対して利潤が支払われる。第３に地主に対して地代が支払われる。

(３)「生産的労働者」のみがモノを生産し、賃金を得て、生産されたモノの一部を消費する。「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」は何も生産しないので、「生産的労働者」の生産したモノの一部を消費する。第１に「生産的労働者」が賃金で購入したモノはもともとは生産的労働者だけを維持するのに充てられるものであったが、生活維持に必要なものを超えるモノがあれば、それはすべて「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」を維持するのに消費される。第２に「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」の消費生活は資本の利潤と土地の地代によって維持される。

(４)生産されたモノは「生産的労働者」「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」によって消費されるが、「生産的労働者」によって消費されるものが多ければ多いほど、翌年のＧＤＰは大きくなる。

【生産的労働者（勤勉） vs. 不生産的労働者（怠惰）】

スミスは、「資本（「生産的労働の維持にあてられる基金」－引用者注）と収入（「不生産的労働の維持にあてられる基金」－引用者注）との比率は、どこでも、勤勉と怠惰との比率を左右するように思われる。資本（賃金－引用者注）が優勢なところでは勤勉が広がり、収入（利潤・地代－引用者注）が優勢なところでは怠惰がはびこる。それゆえ、資本が増減するたびに、勤勉の実際の量、すなわち生産的労働者の数は自然に増減する傾向があり、またしたがって、その国の土地と労働の年々の生産物の交換価値、その国の住民の真の富と収入は、自然に増減する傾向がある。」（訳書 p.632）と述べている。すなわち、第１にＧＤＰは賃金、利潤、地代に分配されるが、スミスによれば、賃金への分配を多くすれば生産的労働者の割合が増え、利潤・地代への分配を多くすれば不生産的労働者の割合が増える、第２にスミスは生産的労働者は勤勉である、不生産的労働者は怠惰であると論じている。

さらに、スミスは、以下のことを指摘している。

(１)「富んだ国 vs. 貧しい国」では、富んだ国は資本が大きく、利潤は大きい、貧しい国は資本が小さく、利潤は小さいが、「富んだ国の利潤率＜貧しい国の利潤率」である（訳書 p.628）。

(２)「富んだ国 vs. 貧しい国」について、「賃金 vs. 利潤・地代」の分配割合を比較すると、「富んだ国の賃金割合＞貧しい国の賃金割合」である。つまり、「生産的労働の維持にあてられる基金 vs. 不生産的労働を愛好する基金」の分配割合を比較すると、「富んだ国の生産的労働の維持にあてられる基金割合＞貧しい国の生産的労働の維持にあてられる基金割合」である（訳書 pp.627-629）。

(３)商業都市・工業都市の下層階級は、消費生活が生産的労働によって維持され、勤勉・真面目・豊かであるのに対して、宮廷所在地の下層階級は、消費生活が上層階級の収入（利潤・地代）によって維持され、怠惰・放縦・貧乏である（訳書 pp.629-632）。

【資本と「節約 vs. 浪費・不始末」】

ＧＤＰは労働、資本、土地によって生産され、スミスは、「資本は、節約によって増加し、浪費と不始末によって減少する。（中略）勤勉ではなくて節約が、資本増加の直接の原因である。」（訳書 pp.632-633）と述べている。つまり、「勤勉」によって所得が生まれ、「所得＝消費＋貯蓄（「節約」）」「貯蓄（「節約」）＝資本の増加」である。

スミスは、「節約 vs. 浪費・不始末」について、以下のことを指摘している。

(１)スミスは、「ある人々の浪費が他の人々の節約によって償われることがないならば、すべての浪費家の行動は、勤勉な者のパンで怠惰な者を養うことになるのだから、かれ自身を乞食にするばかりか、かれの国をも貧困化させることになる。」（訳書 p.635）と述べている。

(２)大国の経済が、個人の浪費・不始末によって大きな悪影響を受けることは起こり得ない。というのは、ある人々の乱費・無思慮は、つねに他の人々の節約・手堅さによって償われるものだからである。（訳書 p.639）

(３)大国が、私的な浪費・不始末によって貧乏になることはないが、公的な浪費・不始末によって貧乏になることはある。というのは、公収入のほとんどが「不生産的労働者」「ぜんぜん労働しない人たち」の生活維持に支出されるからである。（訳書 p.640）
(４)スミスは、「金を使おうとする本能は、ある場合にはほとんどすべての人を支配し、また人によってはほとんどすべての場合にこの本能に支配されているといえるが、大部分の人について、全生涯をつうじての平均をとれば、節約という本能が優位を占めているばかりか、その度合は非常に大きいように思われる。」（訳書 pp.639-640）と述べている。

【スミスは節約は美徳 vs. ケインズは節約は悪徳】
　スミスは、「節約は、生産的労働者の維持にあてられる基金を増加させることによって、その労働が投下される対象の価値を増加させる労働者の数をふやすものである。したがって節約は、その国の土地と労働の年々の生産物の交換価値を増加させる傾向がある。それは、勤労の追加量を活動させ、その追加量が年々の生産物に追加的価値を与えるのである。」（訳書 p.633）と述べている。
　スミス『国富論』の経済学は供給重視の経済学であり、「『節約』（貯蓄）増大→資本（「生産的労働者の維持にあてられる基金」：賃金）の増大→生産的労働者数の増大→ＧＤＰの増大」であるが、ケインズ『一般理論』の経済学は需要重視の経済学であり、「『節約』（貯蓄）増大→消費支出（有効需要）減少→ＧＤＰの減少」である。ＧＤＰ増大の策としては、スミスは、「すべて浪費家は公共社会の敵であり、節約家はすべてその恩人であるように思われる。」（訳書 p.638）と述べ、節約は良い策、浪費・不始末は悪い策と論じているが、ケインズにおいてはまったく逆で、不況下、節約は悪い策、浪費・不始末は良い策である。

【貯蓄→「生産的労働者の消費 vs. 不生産的労働者の消費」】
　貯蓄したものはいずれ消費され、スミスは「それ（貯蓄－引用者注）がだれによって消費されるかによって違いが生じる。」（訳書 p.633）と述べている。つまり、スミスは、第１に貯蓄が不生産的労働者（「怠惰な客人や家事使用人」）によって消費されるのであれば、あとには何も残されない。第２に貯蓄が生産的労働者（「労働者、製造工、手工業者」）によって消費されるのであれば、スミスは「この人たちは自分たちの消費の価値を利潤とともに再生産するのである。」（訳書 p.634）と述べている。

【無分別で不成功に終わる事業企画 vs. 思慮深く成功した企業】
　スミスは、「無分別で不成功に終わる事業企画 vs. 思慮深く成功した企業」について、以下のことを指摘している。
(１)「思慮深く成功した企業」の数は「無分別で不成功に終わる企業」の数よりはるかに多い（訳書 p.640）。
(２)「無分別で不成功に終わる事業企画」は浪費と同様に、生産的労働の維持にあてられる基金を減少させる（訳書 p.638）。

(３)スミスは、「破産は、罪もない人間にふりかかる災厄としては、おそらく最大で、また最も屈辱的なものであろう。」（訳書 p.640）と述べている。

【支出の対象：耐久性あり vs. 耐久性なし】
　個人の収入は次のいずれかに支出される（訳書 p.648）。
(１)「ただちに消費されて、ある日の経費が他の日のそれを軽減もしなければ助けもしないようなもの」
(２)「いっそう耐久性のある、したがって蓄積が可能で、毎日の経費が、かれの好むままに翌日の経費を軽減したり助けたりしてその効果を高めるようなもの」
　スミスは、個人は耐久性のある商品に消費すると、毎日の支出が次の日の支出の効果を助け高めるのに寄与するので、生活はだんだん立派なものになっていくと論じている（訳書 p.649）（注１）。

４　労働の賃金（第１篇　第８章）
【労働賃金の決定と最低賃金：雇用者 vs. 被雇用者】
　スミスは、労働賃金は雇用者（「親方」）と被雇用者（「職人」）の間で決定されるものであり、当時の英国について、以下のことを指摘している。
(１)賃金引き下げのための親方団結を禁止する法令はなかったが、賃金引き上げのための職人団結を禁止する法令はあった。
(２)雇用者（親方）の団結は「いつどこにあっても、一種暗黙の、しかし不断の、統一的な団結」（訳書 p.152）であり、賃金を上昇させないようにしている。
(３)被雇用者（職人）の団結は、第１に官憲の干渉のために、第２に親方の堅固な方針のために、第３に職人が目前の生活に追われて余儀なく屈服させられるために、指導者たちの処罰のほかには何１つ得ることもなしに終った（訳書 p.154）。
(４)スミスは、現在の最低賃金にあたるものについて、「人間はつねに働いて生きてゆかねばならないし、かれの賃銀は少なくともかれの生活を維持するに足りるものでなければならない。いや、たいていの場合、賃銀はこれよりいくぶん多くさえなければならない。」（訳書 pp.154-155）と述べている。

【ＧＤＰ→労働需要→賃金】
　スミスは、「賃銀で生活する人々にたいする需要は、国民の富が増加するにつれて自然に増加するのであって、それなしにはとうてい増加しえないのである。」（訳書 p.157）と述べ、ＧＤＰ（「国民の富」）が年々増大しつつある状況下においては労働需要は増大し、人手不足は雇用者たちの間に被雇用者獲得競争を引き起こし、その結果、労働賃金を引き上げまいとする雇用者たちの自然の団結を自発的に破ってしまい、賃金の上昇をもたらすと論じている。
　スミスは、「北アメリカ vs. イングランド」を比較して「労働の賃銀の上昇をもたらすのは、国民の富の現実の大きさ如何ではなくて、富の恒常的な増加である。」（訳書

pp.157-158）と述べ、「北アメリカの賃金上昇率＞イングランドの賃金上昇率」は、ＧＤＰの水準についての「北アメリカ＜イングランド」ではなく、ＧＤＰの成長率についての「北アメリカ＞イングランド」によるものであると論じている。

【賃金の源泉：「賃銀の支払にあてられるファンド」】

「賃銀の支払にあてられるファンド」「労働の維持にあてられるファンド」、つまり労働者（職人）が受け取る賃金の源泉は「親方の生活維持に必要な部分を超える収入」「親方の業務に必要な部分を超える資本」の２種類である。

スミスは、「賃銀の支払にあてられるファンド」「労働の維持にあてられるファンド」（以下、「賃金ファンド」と略称）が増大している国、停滞している国、減退している国それぞれについて、以下のことを指摘している。

(１)賃金ファンドが増大している国（北アメリカ）では労働需要は増大し、労働需要の増大（人手不足）は賃金を上昇させ、「そこでは、労働の報酬がたいへんよいために、子供が多いということは親たちにとって重荷であるどころか、富裕と繁栄の源なのである。」（訳書 p.159）したがって、スミスは、子供たちの価値は早婚、再婚へのすべての誘因の中で最大のものであると論じている。

(２)賃金ファンドが停滞している国（シナ）では「たとえ労働の賃銀が、労働者を維持し、かれが家庭を扶養しうるに十分な額以上であったにしても、労働者たちの競争と親方たちの利害関係とによって、賃銀はまもなく、普通の人間性を無視しない程度の最低の率にまで引き下げられるであろう。」（訳書 pp.160-161）

(３)賃金ファンドが減退している国（イングランドの東インド植民地）では労働需要は減少し、雇用を求める競争は非常に激しくなり、賃金は労働者の最もみじめで乏しい生存水準にまで引き下げられる（訳書 p.163）。

【人民の幸福度は社会の衰退・停滞・発展に依存】

スミスは、「大多数の人民（「労働貧民」－引用者注）の状態が最も幸福で最も快適であるように思われるのは、社会が富をとことんまで獲得しつくしたときよりも、むしろ富のいっそうの獲得をめざして前進している発展的状態にあるときである」（訳書 p.178）と述べ、社会が発展している国、停滞している国、衰退している国それぞれの大多数の人民（「労働貧民」）の幸福度について、以下のことを指摘している（訳書 pp.164-178）。

(１)社会が発展している国、つまりＧＤＰ成長率、賃金ファンド、賃金上昇率が増大している国の人民は「楽しく健全」である。

(２)社会が停滞している国、つまりＧＤＰ成長率、賃金ファンド、賃金上昇率が停滞している国の労働貧民は生計が乏しく、「つらい」「活気に乏しい」である。

(３)社会が衰退している国、つまりＧＤＰ成長率、賃金ファンド、賃金上昇率が衰退している国の労働貧民は餓死的状態であり、「みじめ」「憂鬱」である。

【ＧＤＰ増大→賃金ファンド増大→人口増大】

スミスは「住民数の増加」が一国の繁栄の最も決定的な指標であると指摘し、「豊かな労働の報酬は、富の増大の結果であるが、同じくまた、人口の増加の原因でもある。」（訳書 p.177）と述べている。つまり、「富（ＧＤＰ）増大→賃金ファンド増大→人口増大」である。

スミスは、賃金と人口について、以下のことを指摘している。

(１)スミスは、「人間にたいする需要は、他のすべての商品にたいする需要と同じように、人間の生産を必然的に左右する。」（訳書 p.176）と述べている。つまり、人間繁殖の状態を左右するものは労働に対する需要である。労働需要がたえず増加するならば賃金は上昇し、賃金上昇は必然的に労働者の結婚・出産を刺激し、増大する労働需要をたえず増大する人口によって満たすことができるようになる。

(２)賃金が高いと、低下層の人々は子供たちによい衣食を与えることができ、その結果、多数の子供を育てることができるので、増殖にたいする限界は自然に広げられる。

(３)スミスは「貧困は、たしかに結婚への意欲をくじくけれど、かならずしもそれを妨げはしない。それは出産にとって好都合でさえあるかにみえる。（中略）女性の贅沢は、おそらく享楽への心の高まりをかき立てるだろうが、それと同時に出産能力をつねに弱め、しばしばそれをまったくなくしてしまうように思われる。」（訳書 pp.173-174）と述べている。つまり、現代用語の合計特殊出生率は下層階級の婦人が上層階級の婦人よりはるかに高いのである。ただし、生活資料の乏しさは子供の死亡率を高め、下層階級の増殖に限界を設定する。

(４)スミスは、「貧困は、たとえ出産を妨げないにしても、子供たちの養育にはすこぶる不都合である。」（訳書 p.174）と述べている。

【賃金の地域間格差】

スミスは、「人間の本性が軽薄で無節操だということについていろいろといわれているが、人間という荷物は、あらゆるもののなかでいちばん輸送が困難だということが経験上明白である。」（訳書 p.167）と述べ、労働移動の困難性が賃金の地域間格差を生んでいると論じている。

【賃金と物価】

スミスは、英国について、第１に食料品価格は賃金に比べて年々の変動が大きく、賃金は食料品価格に比べて場所による変動が大きい、第２に賃金の変動は、場所的にも時間的にも、食料品価格の変動とまったく反対の場合がしばしばある、第３に実質賃金は世紀をつうじて上昇しているといったファクトを指摘し、一方で「賃金は必要生活費の大きさによって規制されないで、仕事の分量とその推定価値によって定まる」（訳書 p.165）と述べ、賃金は物価とともに変動することはないと論じ、他方で賃金は「労働需要」と「物価（生活の必需品と便益品の価格）」（訳書 p.185）によって規制されている、と論じている。

【食料品価格の「安価な年 vs. 高価な年」と賃金】

スミスは、「雇主たちはとうぜん、食料品の高価な年を産業に好都合な年として推奨する。」（訳書 p.182）と述べ、食料品価格が安価な年は労働者が有利であり、高価な年は雇用者が有利であると論じ、以下のことを指摘している。
(１)食料豊富な年には食料品価格は安くなり、食料品価格が安くなると、労働者の雇用にあてられるファンドが増加し、労働需要は増大する。労働需要の増大は賃金を上昇させるので、結果として、食料品価格が安価な年は賃金が上昇する。
(２)食料不足な年には食料品価格は高くなり、食料品価格が高くなると、労働者の雇用にあてられるファンドが減少し、労働需要は減少する。労働需要の減少は賃金を下落させるので、結果として、食料品価格が高価な年は賃金が下落する。
(３)一方で労働需要の増大は賃金を上昇させるが、食料品の低価格は賃金を下落させ、他方で労働需要の減少は賃金を下落させるが、食料品の高価格は賃金を上昇させるので、結果として、賃金は安定的で永続的である（注２）。

【賃金 vs.「労働者のやる気度合いとモラル」】
スミスは、「生活資料が豊富であると労働者の体力は増進する。また自分の境遇を改善し、自分の晩年が安楽と豊富のうちに過せるだろうという楽しい希望があれば、それは労働者を活気づけて、その力を最大限に発揮させるようになる。」（訳書 p.178）と述べている。つまり、高賃金は勤勉の刺激剤であり、賃金の上昇は労働者の勤勉を増進させる。
スミスは、自前の職人の割合が食料品価格が安価な年には増え、高価な年には減ると指摘し、「自前の職人 vs. 固定給の職人」を比較して、自前の職人のモラルは高いが、固定給の職人（仕事に精を出しても出さなくても賃金・手当が同じである職人）のモラルは低いと論じている。

５　資本の利潤（第１篇　第９章）
【労働の平均賃金率 vs. 資本の平均利潤率】
スミスは、「労働の平均賃金とはなにかということを確定するのは、ある特定の場所、ある特定の時点でさえ、容易なことではない。（中略）こうした場合でさえ、最も日常的な賃銀とはなんであるかを決定するのが精いっぱいなところである。ところが資本の利潤となると、こういうことですら滅多に決定できないのである。利潤というものは非常に変動しがちなものであるから、ある特定の事業を営んでいる人でも、自分の年利潤の平均がいったいどれだけであるかを、つねに明らかにできるとはかぎらない。」（訳書 pp.194-195）と述べている。つまり、第１に労働の平均賃金率を確定するのは困難であるが、最も日常的な賃金率を決定するのはできる、第２にさまざまな事業全体の資本の平均利潤率を確定するのはもちろん、最も日常的な利潤率を決定するのも困難である、第３に利潤率は無数の偶発的な出来事からの影響を受け、非常に変動しやすい。

【資本利潤率の特徴】

スミスは、資本利潤率の特徴として、以下のことを指摘している。
(１)スミスは、「利潤（正しくは利潤率－引用者注）の減少は、事業の繁栄の自然的結果であるか、従前よりもいっそう大きい資本が事業に用いられていることの自然的結果なのである。」（訳書 p.200）と述べている。資本の増大は労働の生産力増大によって賃金率を上昇させ、利潤率を低下させ、商品価格を下落させる。
(２)資本が同一事業に振り向けられるとき、資本家相互の競争は利潤率を引き下げる。
(３)スミスは、「資本の利潤の上昇・下落は、労働の賃銀の上昇・下落と同一の原因に、すなわち、社会の富が増加の状態にあるか、減退の状態にあるかに依存する。だが、このような原因が前者と後者とに与える影響は、たいへん異なっている。」（訳書 p.194）と述べている。つまり、ＧＤＰが増加しているときは、賃金率は上昇し、利潤率は低下し、逆にＧＤＰが減少しているときは、賃金率は下落し、利潤率は上昇する。
(４)「大都市 vs. 地方」の利潤率について、大都市においては、人々を雇用するのに十分な資本があるので、資本家（雇用者）間の被雇用者（労働者）獲得競争が激しく、賃金率を引き上げ、利潤率を引き下げる。逆に、地方においては、人々を雇用するのに十分な資本がないので、労働者（被雇用者）間の資本家（雇用者）獲得競争が激しいので、賃金率を引き下げ、利潤率を引き上げる。
(５)スミスは、「獲得可能な富の全量をことごとく獲得しつくしてしまった国、したがってそれ以上は前進もできなければ後退もしていない国では、おそらく労働の賃銀も資本の利潤も、非常に低いであろう。」（訳書 pp.205-206）と述べている。つまり、富裕に到達した国の賃金率・利潤率はきわめて低い。
(６)スミスは、「大きい資本は、たとえ小さい利潤しかあげていなくても、一般に、大きい利潤をあげる小さい資本よりも急速に増大する。金が金を生む、という諺がある。」（訳書 p.203）と述べている。つまり、大きい資本は利潤率は低いが増大スピードは速く、小さい資本は利潤率は高いが増大スピードは遅い。

【利潤率の推移を市場利子率の推移によって判断】
スミスは、平均利潤率が現在どれだけであり、過去はどれだけであったかを正確に定めるのは不可能なことであるが、市場利子率の推移によって、利潤率の推移についてある判断を作り上げることは可能であると論じている。スミスは、「貨幣を使用して多くの儲けがあるところではどこでもその使用にたいしてふつう多くのものが与えられ、また貨幣を使用してわずかな儲けしかないところではどこでもその使用にたいしてふつうわずかなものしか与えられない」（訳書 pp.195-196）と述べ、市場利子率が下がると利潤率も下がる、市場利子率が上がると利潤率も上がるにちがいないと論じている。

【最低の利潤率・利子率 vs. 最高の利潤率・利子率】
(１)最低の利潤率 vs. 最高の利潤率：総利潤率＝純利潤率＋プレミアム
スミスによれば、「総利潤率＝純利潤率（正味の利潤率）＋『特別の損失を償うために保留されるもの』」、つまり「総利潤率＝純利潤率＋プレミアム」であり、スミスは、第１に「最低の通常利潤率は、資本の使用にはつきものの偶発的な損失を償うにたるも

のよりも、つねにいくぶん大きめでなければならない。」（訳書 p.208）と述べている。上記のプレミアム（「資本の使用にはつきものの偶発的な損失を償うにたるもの」）は事業のリスクプレミアム（借手のリスクプレミアム）であり、事業者（借手）が支払うことのできる利子率は純利潤率（正味の利潤率）にのみ比例している、第２に「最高の通常利潤率とは、大部分の商品の価格のなかで、土地の地代となるべき部分全部を食ってしまうような大きさであり、（中略）労働にたいしては、労働が支払われるときの最低率、つまり労働者のぎりぎりの生計に足りる賃銀が支払える分だけを残しておくような大きさである。」（訳書 pp.209-210）と述べている。つまり、「ＧＤＰ＝総賃金＋総利潤＋総地代」であり、「最高の利潤率＝（ＧＤＰ－最低の総賃金）／総資本」であると論じている。

(２)最低の利子率 vs. 最高の利子率：総利子率＝純利子率＋プレミアム

スミスによれば、「総利子率＝純利子率（正味の利子率）＋『特別の損失を償うために保留されるもの』」、つまり「総利子率＝純利子率＋プレミアム」であり、スミスは、「最低の通常利子率は、慎重な配慮をもって貸し付けた場合、なお貸付につきものの偶発的な損失を償うにたるものよりも、つねにいくぶん大きめでなければならない。」（訳書 pp.208-209）と述べている。上記のプレミアム（「特別の損失を償うために保留されるもの」）は貸手のリスクプレミアムであり、スミスによれば、貸手が貸手のリスクプレミアムを上乗せしない貸出は「慈善や友情が唯一の動機」の貸出である。

【利子／利潤】

スミスは、「日常の市場利子率が通常の純利潤率にたいしてとるべき割合は、利潤が上昇または下落するのにおうじて、必然的に変動する。」（訳書 p.210）と述べている。すなわち、利子は利潤から支払われ、「利子／利潤」は当時の英国では通常は５０％であったが、利潤率がきわめて低いときは５０％を下回り、利潤率がきわめて高いときは５０％を上回った。

スミスは、「事業が借入金で営まれる場合には、純利潤の半分が利子にまわるというのが妥当であろう。」（訳書 p.210）と述べ、純利潤の半分は貸手に、残りの半分は借手（事業者）に帰属すると指摘し、借手（事業者）に帰属する純利潤は「事業リスク負担に対する報償」「この資本を用いる煩わしさに対する報償」であると論じている。

【商品価格の上昇：賃金は算術級数的比率 vs. 利潤は幾何級数的比率】

スミスは、「高い利潤は高い賃銀よりも製品の価格を大きく引き上げる傾向がある。」（訳書 p.211）と述べている。スミスにおいては、製品価格は賃金・利潤・地代から構成され、さまざまな製造段階のすべてをつうじて、賃金上昇による製品価格の上昇は算術級数的比率で上昇するが、利潤増大による製品価格の上昇は幾何級数的比率で上昇する、つまり「諸商品の価格を引き上げるという点からみると、賃銀の上昇は、単利が負債の累積に作用するのと同じような仕方で作用する。これに対して利潤の上昇は、複利と同じように作用する。」（訳書 p.212）と述べている。

## ６　賃金・利潤の格差（第１篇　第10章）

【完全自由と利益・不利益の均等化】

スミスは、物事が自然の成行きに従うままに放任され、完全な自由が行われている社会では、第１に「労働と資本の用途が異なることから生じる利益と不利益は、これを全体としてみると、同一地方では完全に均等であるか、またはたえず均等化される傾向がある。」（訳書 p.214）、第２に「もし同一地方で、どれか１つの職業が、そのほかの職業にくらべて明らかに利益が多いか、または少ないかするなら、前の場合には多数の人がその職業に殺到するだろうし、後の場合には多数の人がそれを見捨てるだろうから、その職業の利益は、まもなく他の職業の利益と同じ水準になるであろう。」（訳書 p.214）と述べている。

上記引用文中の「職業」は個人企業家であり、個人企業家は賃金と利潤の両方を得ることができる。スミスは、「しかし」ということで、「職業自体の特定の事情」「どこででも物事を完全な自由のままにしておかない、あのヨーロッパ諸国の政策」（訳書 p.215）の２つの理由から、「労働と資本の用途が異なることから生じる利益と不利益」は均等化しない、「その職業の利益は、まもなく他の職業の利益と同じ水準」にならない、つまり賃金・利潤の格差が生じると論じている。

【各職業の利益・不利益均等化の３つの条件】

スミスは、各職業の利益・不利益が均等化するためには、「最も完全な自由がある」という条件の他に、以下の３つの条件が必要であると論じている（訳書 p.242）。

(１)「これらの職業はその近隣地方でよく知られており、また長年にわたって営まれてきたものである」こと

これに関して、スミスは、第１に新事業の賃金は旧来事業の賃金よりも高い、第２に製品需要が不安定である製造業の賃金は製品需要が安定している製造業の賃金より高い、と指摘している。

(２)「これらの職業はその通常の状態、すなわち、いわゆる自然の状態になければならない」こと

(３)「これらはそれに従事する人々にとって唯一、または主要な職業でなければならない」こと

### ６－１　賃金・利潤の格差：職業自体の性質から

【職業の賃金格差・利潤格差の５つの要因】

スミスは、さまざまな職業の「金銭的利得」（賃金・利潤）のちがいを生む要因として「職業自体が快適であるかないか」「それらの職業を習得するのが簡単で安上りかそれとも困難で費用がかかるか」「それらの職業における雇用が安定しているかいないか」「その職業に従事する人たちによせられる信頼度が大きいか小さいか」「そうした職業において成功する可能性があるかないか」といった５つを挙げている（訳書 pp.215-216）。ただし、スミスは上記の５つの要因によって、さまざまな職業の賃金・利潤の

格差を生んでも、「実際上または世評の上での利益と不利益を全体としてみれば、いかなる不公正をもひきおこしてはいない。」（訳書 p.241）と述べている。

職業の賃金格差・利潤格差を生む５つの要因は以下のとおりである。人間生活の観察者アダム・スミスの真価発揮で、さまざまな職業の賃金格差・利潤格差の理由が興味深く指摘されている。

(１)職業の快適度

各職業の賃金は、その職業が「やさしい vs. 苦しい」「清潔 vs. 不潔」「名誉 vs. 不名誉」によって異なる。やさしい、清潔な、名誉な職業の賃金は低く、苦しい、不潔な、不名誉な職業の賃金は高い。スミスは、「社会の進歩した状態のもとでは、他の人々が気晴らしにやっていることを職業（狩猟、漁撈－引用者注）としている人たちは、みな貧乏している。」（訳書 p.217）と述べている。

各職業の利潤は、「快適である vs. 快適でない」「体裁がよい vs. 体裁が悪い」によって異なる。快適である、体裁がよい職業の利潤は低く、快適でない、体裁が悪い職業の利潤は高い。スミスは、「宿屋や居酒屋の経営主は、自分の家でありながら思うままに振舞うこともできず、酔っ払いたちにひどいめにあわされ、快適でもなければ名誉でもない仕事に従事している。だが、小さい資本でこれほど大きい利潤をあげるような職業は滅多にない。」（訳書 pp.217-218）と述べている。

(２)職業の習得の簡単・困難

各職業の賃金は、その職業の習得の「簡単 vs. 困難」「低費用 vs. 高費用」によって異なる。習得の簡単、低費用の職業の賃金は低く、習得の困難、高費用の職業の賃金は高い。スミスは、「その人が習得する仕事は、普通の労働の日常の賃銀に加えて、かれの全教育費を、少なくともそれと同等の価値ある資本の通常利潤とともに回収するだろう。」（訳書 p.218）と述べている。

各職業の利潤は、習得の難易にはごくわずかしか影響されない（注３）。

(３)職業における雇用の安定性

スミスによれば、雇用の安定性は職業によって大きい差があるとされ、各職業の賃金は、雇用の「安定 vs. 不安定」によって異なる。雇用が安定していれば賃金は低く、雇用が不安定であれば賃金は高い。スミスは、「一般に安定的な雇用を提供する事業が、たまたま特定の地方で安定的な雇用を提供しなくなると、職人たちの賃銀は、つねに普通の労働の賃銀にたいする通常の割合を大きく上回って上昇する。」（訳書 p.222）と述べている。

各職業の利潤は、雇用の「安定 vs. 不安定」に左右されない。この理由について、スミスは、「資本が恒常的に用いられているかいないかは、事業に依存するものではなくて、事業家に依存するものだからである。」（訳書 p.224）と述べている。

(４)職業従事者に対する信頼度

各職業の賃金は、その職業に従事する人たちに寄せられる「信頼度が高い vs. 信頼度が低い」によって異なる。スミスは、「医師、法律家、弁護士の報酬は、その重大な信任にふさわしい社会的地位をかれらに与えるようなものでなければなるまい。」（訳書 p.224）と述べ、職業従事者に対する信頼度が低ければ賃金は低く、職業従事者に対する信頼度が高ければ賃金は高いと論じている。

各職業の利潤は、職業従事者に対する信頼度に左右されない。スミスは、「その人が他の人々からかちえる信頼は、かれの事業の性質によるものではなくて、かれの財産、誠実、深慮についての他人の評価によるものである。」（訳書 p.225）と述べ、各事業における利潤率の差異は事業従事者に対する信頼の程度から生じるものではないと論じている。

(５)職業における成功の可能性

各職業の賃金は、その職業における「成功の可能性の高い vs. 成功の可能性の低い」によって異なる。

(1)靴屋 vs. 弁護士

スミスは、靴屋の徒弟になれば靴作りを習得するのはほぼ確実であるが、法律の勉強をしても弁護士になれるのはきわめて不確実であると指摘し、そして、これを富くじにたとえ、当たりくじを引いた人たちが、空くじを引いた人たちが失ったところのすべてを手に入れるのが当然であるように、不確実性下、弁護士になれた人たちはなれなかった人たちの賃金を手に入れるが当然であるので、弁護士の賃金が靴屋の賃金よりはるかに高いのは自然であると論じている。

スミスは、「１人が成功するのにたいして２０人が失敗するような職業では、その１人は、失敗した２０人が手に入れるはずだったすべてを手に入れるのが当然である。」（訳書 pp.225-226）と述べ、さらに「法律という宝くじは、完全に公平な富くじからはほど遠いものであって、それは、他の多くの自由で名誉ある職業と同じように、金銭上の儲けという点では、明らかに割に合わない報酬なのである。」（訳書 p.226）と述べている。

(2)医師・法律家・詩人

スミスによれば、世間の賞賛は才能の報酬の一部を形作るものであり、報酬の大小は賞賛のいかんに比例している。スミスは、「この賞賛こそは、医師という職業では、報酬のかなりの部分を占めており、法律を扱う職業ではおそらくなおいっそう大きい部分を占め、詩や哲学においてはそれがほとんど全体を占めている。」（訳書 p.227）と述べている。

(3)俳優・オペラ歌手・ダンサー

スミスは、「世には楽しくて美しい才能がいくつかある。そうした才能をそなえていると、一種の賞賛を博することになるが、それらを金儲けのために行使すると、理性によるか偏見によるか、どちらにせよ、一種の社会的な悪用とみなされる。」（訳書 p.227）と述べ、俳優・オペラ歌手・ダンサーなどの、才能を金儲けのために行使する人々の金銭上の高額報酬は「その才能を獲得するための時間・労力・費用に対する報償」「生

計の資としてその才能を用いることに伴う不名誉に対する報償」の２つをともに含んでいると論じている。

各職業の利潤は、事業の「成功の可能性の高い vs. 成功の可能性の低い」によって異なる。つまり収益の確実・不確実に応じて変動する。これについて、スミスは、「利潤の通常率は、多かれ少なかれ、つねに危険とともに上昇する。けれども、それは危険に正比例して、すなわち危険を完全に償うほどに上昇するとは思われない。」（訳書 p.235）と述べている。

かくて、スミスは、各職業の賃金は上記の５つの要因によって異なっているが、各職業の利潤は５つの要因のうちの２つ、すなわち「職業の快適度」「成功の可能性」によって異なる（訳書 pp.215-216）と論じ、同一社会・同一地域では、賃金率の職業間格差は大きいが、利潤率（平均利潤率）の職業間格差は小さいと結論づけている。

【成功・失敗のリスクと職業】

スミスは、人間は、「一応の健康と気力があれば」（訳書 p.229）リスク愛好者であると指摘し、儲けるチャンスを過大評価し、損をするチャンスを過小評価すると論じ、このことから「冒険生活につきものの危険や危機一髪の脱出というようなことは、青年たちの勇気をくじくどころか、かれらがその職業を選ぶことをしばしばうながすようにみえる。」（訳書 p.234）と述べている。つまり、青年は成功・失敗のリスクの高い職業をあえて選ぶ性向があるのである（注４）（注５）。

【利潤率と破産】

スミスは、利潤率が危険を完全に償うものである、すなわち、利潤率が「資本の通常利潤」「損失全部の埋め合わせ」「保険業者の利潤と同一性質の余剰利潤」のすべてを含んでいれば、破産は頻発することはないと論じている（訳書 pp.235-236）。

【「賃金とみなすべきもの」 vs. 「利潤とみなすべきもの」】

スミスは、例えば薬剤師・食料雑貨商などの職業においては、賃金とみなすべきものと、利潤とみなすべきものとを必ずしも区別できないことから、薬剤師・食料雑貨商などの職業の利潤を「外見上の利潤」と呼び、薬剤師の利潤は「この外見上の利潤の大部分は、利潤という衣で偽装された事実上の賃銀にほかならない。」（訳書 p.237）、食料雑貨商の利潤は「外見上の利潤の大部分は、ここでもまた事実上の賃銀なのである。」（訳書 p.238）と述べている。

【投機的な商人】

大都市では、正規の、基礎の確立した、世間周知の事業で巨額の利潤を得ることは滅多に起こらないが、「投機」によって、予期もしない利潤が一朝にして得られることはよくある。投機的な商人は、正規の、基礎の確立した、世間周知の事業では仕事をせず、普通以上に利潤があるらしいということが予期される場合にはどんな事業にも手を出す。

スミスは、投機的事業は「大都市以外の場所ではとても営むことはできない。それに必要な情報が手にはいるのは、最も大規模な商業と通信が発達している場所にかぎられるからである。」（訳書 p.241）と述べている。

６－２　賃金・利潤の格差：ヨーロッパ諸国の政策から

【各職業の賃金格差・利潤格差を生む３つの要因】

スミスは、ヨーロッパ諸国の政策は「最も完全な自由がある」という条件を満たさず、各職業の利益・不利益の不均等化をさらに拡大させている要因として、「ある種の職業における競争を制限して、そうでなければこれらの職業に就きたがる人々の数を制限すること」「他の職業での競争を、そうでなければ自然に行なわれる以上に増大させること」「職業から職業へ、地方から地方への、労働と資本の自由な流通を妨げること」といった３つを挙げている（訳書 p.251）。

職業の賃金格差・利潤格差を生む３つの要因は以下のとおりである。

(１)職業への参入制限

ヨーロッパ諸国の政策（同業組合の排他的特権など）は、ある種の職業では競争を少人数に制限し、自由であればこの職業に入り込もうとする者の数を少なくすることによって、各職業の利益・不利益の不均等を引き起こしている。スミスは、同業組合の排他的特権（徒弟制度）に対しては批判的であり、以下のことを指摘している。

(1)スミスは、「貧しい人が親からゆずられた財産は、自分の両手の力と技能のうちにある。そして、かれがこの力と技能とを、隣人を害することなしに、自分が適切と思う方法で用いるのを妨げることは、この最も神聖な財産の侵害であることは明らかである。（中略）ある人が雇われるのにふさわしいかどうかの判断は、その利害に大きい関心をもつ雇主たちの分別にゆだねておいてまちがいはない。かれらが適当でない人物を雇ったりしないように、という立法者のよけいな心配は、明らかに行きすぎであり、またさしでがましいことでもある。」（訳書 pp.257-258）と述べ、徒弟制度は職人および職人を雇用しようとする人々の正当な自由に対する侵害であると論じている。

(2)スミスは、長期徒弟修業制度は、第１に「不完全な出来ばえの制作品が市場に出回ることがあるのを防ぐ保証となるものではない。それが市販されるのは、ふつうは詐欺のせいであって、職人の無能のせいではない。」（訳書 p.258）、第２に「青年を勤勉にしたてあげるという効果はない。（中略）若い人は、長いあいだその労働からなんの利益を受けないでいると、労働に嫌悪の情をいだくのが自然である。」（訳書 p.259）と述べ、長期にわたる徒弟修業はまったく不必要であると論じている。

(3)スミスは、同業組合制度は自由競争を制限することによって、「自由競争が確実に引き起こす価格の低落、またしたがって賃銀と利潤の低落を防止する」（訳書 p.261）と述べている。

(２)職業上の過熱競争

各職業の利益・不利益の不均等化をさらに拡大する第１の条件は「職業上の競争制限」であったが、第２の条件はこれとは逆で「職業上の過熱競争」である。スミスは、

「教師という職業には公共の費用で育成された貧しい人々がむらがるのにたいし、法律家や医師という職業では、自費で教育を受けた人たちで席がほとんどいっぱいになる」（訳書 p.271）と述べ、公共の費用で教育を受けるならば競争が激しくなり、競争は教師たちの労働の価格（賃金）と人格に対する賞讃を低下させると論じ、さらに、「公共の教師 vs. 法律家・医師」の利益・不利益の不均等は、学芸上の教育を安価にすることにより、社会にとっては有益であると論じている（注６）。

(３)労働・資本移動の不完全性

各職業の利益・不利益の不均等化をさらに拡大する第３の条件は、職業から職業へ、１つの場所からもう１つの場所への、労働・資本の自由な移動を妨げることである。

【都市（製造業・商業） vs. 農村（農業）】

スミスは、「都市（製造業・商業） vs. 農村（農業）」の対立軸で、以下のことを指摘している。

(１)売手は市場をつねに供給不足にしておくことによって利益を得ようとする。都市内部での各階級間の相互取引では、どの階級も損をすることはないが、「都市 vs. 農村」では、都市はつねに得をし、農村はつねに損をしている。スミスは、「いかなる都市をも維持し、富ませる商業のすべては、農村との取引のなかにあったのである。」（訳書 p.263）と述べている。

(２)都市の住民は狭い地域に住んでいるので団結・組合化しやすく、農村の住民は広い地域に住んでいるので団結・組合化しにくいことから、「都市で営まれる産業 vs. 農村で営まれる産業」では、都市で営まれる産業（製造業・商業）は農村で営まれる産業（農業）より有利である（注７）。

(３)「都市の賃金・利潤 vs. 農村の賃金・利潤」では、都市の賃金・利潤は農村の賃金・利潤よりも高い。

(４)労働・資本は最も有利な用途を探し求めるので、労働・資本は都市へ流入し、農村から流出する。しかし、資本が増大すると競争が激しくなり、資本の利潤率は低下する。都市における資本利潤率の低下は、農村を犠牲にして蓄積された大量の資本の一部を都市から農村へ押し出し、農村は資本が用いられることによって改善される。

(５)輸入関税により、外国人の自由競争による製品の値崩れを防ぐことができ、都市の産業（製造業・商業）は農村の産業（農業）より有利である。スミスは、「この両方（同業組合法と輸入関税－引用者注）からひきおこされる価格の上昇は、結局はどこででも、農村の地主、農業者、労働者によって負担されるのであるが、しかもかれらは、こうした独占の確立に反対したことは滅多にないのである。」（訳書 p.268）と述べている。

【同業組合】

スミスは、同業者の集まりは気晴らしのためであるといっても、会話はきまって社会公共に対する陰謀であると指摘し、さらに「同業組合は職業をいっそうよく管理するう

えに必要だという主張には、なんの根拠もない。職人にたいして課される実質的で有効な訓練は、かれが属する同業組合のそれではなく、実は顧客たちが職人に課す訓練なのである。職人たちが詐欺行為を抑制し、怠慢をあらためるのは、顧客たちによる雇用の道がなくなることを恐れるからである。」（訳書 p.271）と述べている。

## 7　土地の地代（第１篇　第11章）

【「地代 vs. 『自然の地代』」の定義】

スミスは、「地代」を「土地の使用にたいして支払われる価格」「借地人がその土地の現実の状態のもとで支払うことのできる最高の価格」（訳書 p.301）と定義している。

スミスは、「自然の地代」を「大部分の土地をそれだけの地代で貸してもいいととうぜん考えられる場合の地代」（訳書 p.302）と定義している。

【「改良されていない土地 vs. 改良された土地」の地代】

スミスによれば、地主は、改良されていない土地に対してさえ地代（「本来の地代」）を要求し、土地の改良に対して見込まれる報酬（土地改良のために投下された資本の利潤・利子）は「本来の地代」に上乗せされる。

土地の改良は、地主の資本によっても、借地人の資本によってもなされることがある。しかし、借地契約の更新時には、地主は、土地改良はすべて地主の資本でなされたものであるかのように、地代の増加を要求する。

【「賃金・利潤は原因 vs. 地代は結果」：商品価格】

商品生産への投入が労働、資本、土地であるときは、商品の価格は労働者に対する労働賃金、資本提供者に対する資本利潤および地主に対する地代から構成されている。スミスは、しかし注意しなければならないことはと言って、賃金・利潤の高い・低いは商品価格の高低の原因であるが、逆に地代の高い・低いは商品価格の高低の結果であると論じている。

【第１１章の構成：地代を生じる vs. 地代を生じない】

「商品価格＝賃金＋利潤＋地代」であり、「商品価格＞（賃金＋利潤）」ならばプラスの地代が生じ、「商品価格＜（賃金＋利潤）」ならば地代が生じない、という意味で、地代の高い・低いは商品価格の高低の結果である。第１１章は「地代を生じる vs. 地代を生じない」についての章であり、以下の３つの節からなっている。

第１節　つねに地代を生じる土地生産物について

第２節　ときには地代を生じ、ときにはそれを生じない土地生産物について

第３節　つねに地代を生じる種類の生産物と、ときには地代を生じときにはそれを生じない種類の生産物との、それぞれの価値のあいだの比率の変動について

【人間の三大欲望と地代：食、衣、住】

スミスによれば、「食（食物）」「衣（衣服）」「住（住居）」は人間の三大欲望であり、食物・衣服・住居はすべて土地からの生産物である。スミスは、「人間の食物は、つねに、そしてかならず、地主に多少なりとも地代をもたらす唯一の土地生産物であるように思われる。他の種類の生産物（衣服・住居－引用者注）はこれと事情を異にして、地代を生じることもあれば生じないこともある。」（訳書 p.335）と述べている。つまり、食物は「つねに地代を生じる土地生産物」であり、衣服・住居は「ときには地代を生じ、ときには地代を生じない土地生産物」である。

## ７－１　地代をつねに生じるとき：食物

【「都市周辺の農地 vs. 遠隔地の農地」の地代：土地の位置】

地代は、その土地の生産物が何であれ、「土地の位置」「土地の豊度」によって異なる。遠隔地の農地の地代は都市周辺の農地の地代よりも２つの理由で低い。第１の理由として、スミスは、「どちらの土地を耕すにも、そのための労働には大きい差はないだろうが、遠隔地の生産物を市場へもたらすためにはより多くの労働が用いられるだろう。」（訳書 p.309）と述べている。つまり、「地代＝商品価格－（賃金＋利潤）」であり、遠隔地の農地は生産物を都市に輸送するのに労働、したがって賃金を要するので、遠隔地の農地の地代は低い。第２の理由は遠隔地の利潤率は都市周辺の利潤率より高いので、遠隔地の農地の地代は低い（注８）。

【土地改良と「農業者の利潤 vs. 地主の地代」】

スミスによれば、生産に適するように土地を改良する必要のある生産物（ホップ、果樹、野菜など）があり、土地改良の１つは「土地に多額の投資をして基礎的改良を施すか」、もう１つは「土地に年々多額の耕作費をかけるか」のいずれかである。スミスは、土地に多額の投資をすればより多くの「地主の地代」を生み、土地に年々多額の耕作費をかければより多くの「農業者の利潤」を生むと論じている。

## ７－２　地代を生じたり、生じなかったりするとき：衣服・住居

【「原始未開の状態 vs. 土地の改良が進んだ状態」と地代】

スミスによれば、原始未開の状態では、土地は衣服・住居の材料を過大に供給していたので、衣服・住居の材料価格は低くなり、「衣服・住居の材料価格－（賃金＋利潤）＝地代＜０」であった。土地の改良が進んだ状態では、土地は衣服・住居の材料を過小に供給することもありえたので、衣服・住居の材料価格は高くなり、「衣服・住居の材料価格－（賃金＋利潤）＝地代＞０」であった。

【「衣服 vs. 住居」と地代】

スミスによれば、衣服・住居は「ときには地代を生じ、ときには地代を生じない土地生産物」である。一方、衣服の材料は国内の遠方へ輸送できるし、また外国へ輸出できるので、もし衣服の材料を国内の遠方へ輸送し、また外国へ輸出するならば、国内・外国で需要を見出し、衣服の材料価格は高くなり、「衣服の材料価格－（賃金＋利潤）＝

地代＞０」である。他方、住居の材料は国内の遠方へ輸送できるものではないし、また外国へ輸出できるものではないので、住居の材料が過大生産になると、住居の材料価格は低くなり、「住居の材料価格－（賃金＋利潤）＝地代＜０」であった。

【食物 vs. 衣服・住居】

土地の改良によって、１人の労働で２人分の食物を生産できるようになると、社会の半数の労働で社会全体が必要とする食物を生産できるようになるので、社会の他の半数は食物以外のモノを供給する仕事に、すなわち人間の三大欲望「食、衣、住」のうちの食以外の欲望を満たす仕事に従事することができる。

「富裕者 vs. 貧困者」の食物に対する欲望は、富裕者・貧困者はともに胃の腑の容量に限りがあるので消費の量に関してはほぼ同じであるが、消費の質に関しては大いに異なっている。「富裕者 vs. 貧困者」の衣服・住居に対する欲望は、消費の量・質ともに大いに異なっている。

【「炭坑 vs. 金属鉱山」と地代】

スミスは、「炭坑 vs. 金属鉱山」について、「炭坑の所有者にとってその炭坑の価値は、その豊度に依存するのと同時に、その位置に依存することが多い。だが、金属鉱山の価値は、その豊度に依存することは多いけれど、その位置に依存することははるかに少ない。」（訳書 pp.346-347）と述べている。すなわち、炭坑の生産物（石炭など）のマーケットはローカルで、非競争的であるが、金属鉱山の生産物（金、銀など）のマーケットはグローバルで、競争的である。したがって、互いに遠く離れている炭坑の生産物（石炭など）は決して競争し合うことにはならないが、金属鉱山の生産物（金、銀など）については、最も遠く離れている鉱山の間でも競争が起こると論じている。

スミスは、「すべての鉱山におけるあらゆる金属の価格は、現に採掘されている世界きっての産出力に富む鉱山での金属の価格によってある程度規制されるものである。」（訳書 p.348）ということから、「炭坑・金属鉱山の生産物価格－（賃金＋利潤）＝地代≒０」つまり、炭坑・金属鉱山の地代はほとんどゼロであると論じている（注９）。

【貴金属の「最低価格 vs. 最高価格」】

貴金属の最低価格（販売されうる最低価格：供給価格）は「賃金＋利潤」によって、貴金属の最高価格は貴金属の「希少 vs. 豊富」によってそれぞれ決定される。

貴金属に対する需要は、１つは効用から、もう１つは美しさから生じ、スミスは、有用性、美しさ、希少性の３つが貴金属が高価である理由であると論じている（注10）。

【「貴金属 vs. 宝石」と地代】

貴金属に対する需要は、有用性と美しさの２つの性質から生じるが、宝石に対する需要は美しさのみから生じ、美しさの効用は希少性（鉱山から宝石を得る費用）によって大いに高められる。

貴金属・宝石の価格はともにほとんど「賃金＋利潤」であり、貴金属・宝石を生む鉱

山の地代はほぼゼロである。ただし、スミスは「貴金属でも宝石でもそのどれかの鉱山が所有者に提供する地代は、その鉱山の絶対的豊度に比例するのではなく、同種の他鉱山にたいするその鉱山の優越の度、すなわち相対的豊度に比例するのである。」（訳書 p.356）と述べている。

７－３　地代をつねに生じる生産物の価値と、地代を生じたり、生じなかったりする生産物の価値との間の比率について：食物 vs. 衣服・住居

【土地生産物：「つねに地代を生じる」 vs. 「ときには地代を生じ、ときには地代を生じない」】

食物は「つねに地代を生じる土地生産物」であり、衣服・住居は「ときには地代を生じ、ときには地代を生じない土地生産物」である。土地の改良が進めば、食物の生産量はますます増え、これは衣服・住居に対する需要を増大させる。かくて、土地の改良が進めば、「ときには地代を生じ、ときには地代を生じない土地生産物」（衣服・住居）の価値は、「つねに地代を生じる土地生産物」（食物）の価値に比例して上昇する。

８　労働者、資本家、地主の利害（第１篇　第11章）

【社会状態の改善と地代】

社会状態の改善は、第１に直接に「真の地代」を引き上げる。つまり土地の改良と耕作の拡大は土地の原生産物を増大させ、土地の原生産物に対する地主の分け前（地代）を引き上げる。第２に間接に「真の地代」を引き上げる。つまり、労働生産力の増大は直接には製造品（便益品、装飾品、奢侈品）の真の価格を引き下げるが、間接には「真の地代」を引き上げる。

【３大階級の利害：賃金で生活する人、利潤で生活する人、地代で生活する人】

スミスによれば、「年々の生産物の全価格は、（中略）土地の地代、労働の賃銀、資本の利潤という３つの部分に自然に分れ、３つのちがった階級の人々、すなわち地代で生活する人々、賃銀で生活する人々、利潤で生活する人々の収入を構成する。」（訳書 p.490）と述べている。つまり、地代で生活する人、賃金で生活する人、利潤で生活する人はあらゆる文明社会の３つの大きな基本的構成要素をなす階級である。

(１)賃金で生活する人

賃金で生活する人の利害は社会の一般的な利害と密接不可分に結びついている。スミスは、「土地所有者の階級は、おそらく社会の繁栄によって、労働者の階級よりもいっそう多く利得するであろうが、社会の衰退によって、労働者の階級くらいひどく苦しむ階級はほかにはない。」（訳書 p.492）と述べている（注11）。

(２)利潤で生活する人（雇主）

利潤で生活する人（雇主：商人、親方製造業者など）の利害は、公共社会の利害と対立することさえある。つまり、市場を拡大しかつ競争を制限することは利潤で生活する

人の利益である。市場を拡大することは公共社会の利益と十分に一致することがしばしばあるが、競争を制限することはつねに公共社会の利益に反するにちがいない。雇主（資本の使用者：商人、親方製造業者など）の計画・企画が労働を規制・指導するが、スミスは、「利潤の率は、地代や賃銀のように、社会の繁栄とともに上昇し、その衰退とともに低落するというものではない。むしろ反対に、利潤の率は富裕な国では低く、貧しい国では高いのが自然であり、また、急速に破滅に向いつつある国では、それはつねに最も高いのである。」（訳書 p.493）と述べている。

(３)地代で生活する人

地代で生活する人は無知であり、その利害は社会の一般的な利害と密接不可分に結びついている。

脚注

（注１）ただし、スミスは、「耐久性のある財に支出する経費の場合、（中略）軽薄な品物（安っぽい飾り物など－引用者注）に向けられた場合には、ただ軽薄だというだけでなく、いやしい利己的な性向を示すことがしばしばある。」（訳書 pp.652-653）と述べている。

（注２）賃金が上昇すると商品価格が必然的に上昇し、商品価格上昇は商品需要を減少させる。賃金が下落すると商品価格が必然的に下落し、商品価格下落は商品需要を増大させる。

（注３）「熟練労働の賃金＞普通労働の賃金」であり、スミスによれば、ヨーロッパ諸国の政策は機械工・手工業者・製造工の労働を熟練労働、農村労働者の労働を普通の労働とみなしているが、スミスは機械工・手工業者・製造工の労働が普通の労働、農村労働者の労働が熟練労働であると論じている。

（注４）これについて、スミスは、「儲けのチャンスは自然に過大評価されるものだということは、富くじ事業がどこでも成功するということから知ることができる。」（訳書 p.229）と述べている。

（注５）これに関連して、スミスは、「保険業でいくらかの金儲けをした人は多数いるが、それで大きい財産をこしらえた人は非常に少ない。」（訳書 p.230）と述べ、つまり、火災保険・海上保険の業者の利潤がきわめて穏当であると論じている。というのは、人は損をするチャンスを過小評価し、つまり危険をあまりに軽視し、それだけを支払っておけば危険を保障してもらえるものと期待していい最低価格しか支払わないからである。

（注６）スミスは、「印刷術が発明されるまでは、学徒と乞食とはほとんどおなじ意味の言葉であったように思われる。その当時までの大学の総長たちは、かれらの学生にたいして、乞食をすることの免許状を与えたことがしばしばあったらしい。」（訳書 p.277）と述べている。

（注７）さらに、都市の産業は同業組合法のおかげで同国人の自由競争による製品の値崩れを防いでいる。スミスは「農業労働の賃金＜機械工の賃金」に不満であり、「美術

や自由職業とよばれるものに次いで、この職業（農業）ほど種々さまざまな知識と経験を必要とするものは、おそらくないだろう。（中略）だから、シナやインドでは、農村労働者の身分と賃銀はともに、大部分の手工業者や製造業者よりも勝っているという話である。もし同業組合法と同業組合精神によって妨げられなければ、おそらくどこでもこのようになるであろう。」（訳書 pp.266-268）と述べている。

（注８）スミスは、「良い道路、運河、航行可能な河川は、輸送費を減少させるので、遠隔地の農村を都市周辺の土地とほぼ同格なものにする。この点で、これはあらゆる進歩のなかで最もすぐれたものだといえる。」（訳書 p.309）と述べ、交通インフラの整備は都市周辺にある農村地帯の独占を破壊するので、都市にとっても、都市周辺の農村にとっても好都合であると論じている。スミスは、「独占は良い経営にとっての大敵である。」（訳書 p.309）と述べ、良い経営は、普遍的で自由な競争の結果としてのみ達成されると論じている。

（注９）『国富論』は第１１章の貴金属・卑金属の話の中で「日本の銅はヨーロッパ市場で商品になっているし、（中略）日本における銅の価格は、ヨーロッパの銅山における価格に幾分か影響をあたえるにちがいない。」（訳書 p.347）と述べ、「日本」の名前が出ている。

（注10）スミスは有用性、美しさ、希少性の３つの性質があるからこそ、貴金属が鋳貨として使用されるようになったと論じている。

（注11）スミスは、「労働者の生活状態は、必要な情報を得るための時間をかれに与えないし、またかれの教育と習慣は、たとえかれが十分な情報を得たとしてもそれを判断する力のない者にしてしまうのが普通なのである。したがって、公共的なものの審議にあたっては、労働者の声はほとんど聞かれず、その声はあまり尊重もされない。」（訳書 p.492）と述べている。

## 参考文献

Smith,A., An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,5th. edition,London,1789（大河内一男監訳『国富論　Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ』（中公文庫）、中央公論新社、１９７８年４月）。

滝川好夫『アダム・スミスを読む、人間を学ぶ。－いまを生き抜くための『道徳情操論』のエッセンス－』ミネルヴァ書房、２０２２年８月。